

『アルヴァイナの墮落』論

——「墮落」の意味(1)——

山 田 晶 子

序

『アルヴァイナの墮落』¹⁾は、原題が *The Lost Girl*²⁾である。この“Lost”という言葉の意味は、辞書によると大きく分けて9つあるが³⁾、これらのうちでこの小説に当てはまるのは5つであると考えられる。つまり“Lost”には重層的な意味が含まれているのである。これら5つの意味とは①「失われた、なくなった」、②「ゆくえ不明の」、③「道に迷った」、④「夢中になった」、そして⑤「狂気のような」である。この5つの意味は小説中で具体的にどのような内容を表わしているかと言えば、①は「アルヴァイナが（自らの上流階級意識を）失った、ゆえに墮落した」という意味であり、②は「（アルヴァイナがイタリアの山中に夫のチッチョと入っていったためにイギリスの良識ある中・上流社会から）姿が見えなくなった、つまりゆくえ不明になった」という意味であり、③は「（アルヴァイナが、チッチョと結婚する以前にミッチェル医師と婚約しており、その医師から離れた後チッチョに求婚されたがどちらを選ぶかを）迷った」という意味であり、④は「（アルヴァイナがチッチョに）夢中になった」という意味であり、そして⑤はアルヴァイナがナッチャ・キイ・タワラ座と一緒に旅回りをするというのを聞いたミ

ス・ピネガーが「あなた（アルヴァイナ）は狂っている」と叫ぶときの「気が狂った」という意味である。しかしこれら5つの意味合いが全て「文字通りに」彼女に当てはまるのかと言えば、筆者にはそうではないと思われる。

『アルヴァイナの墮落』が1920年に出版されて以来、様々な批評が書かれているが、それらの中にはアルヴァイナが文字通り「墮落した」女性であり「ゆくえ不明になった」女性であるとして、アルヴァイナの生き方を否定的に捉え、この小説を低く評価しているものがある。たとえばヴァージニア・ウルフは「アルヴァイナは徐々に姿を消してゆき、最後には我々はもはや彼女の存在が消えてしまったという思いだけになる」と述べているし⁴⁾、キャサリーン・マンズフィールドは「ロレンスは、人間性や想像力を否定している。男女の主人公は非人間的である。彼らは感じるができない動物である。顔がないし理知がない」と述べ⁵⁾、またマンズフィールドの夫でありロレンスの理解者であったジョン・ミドルトン・マリはある程度はこの小説を賞賛しているが、主人公の2人については「彼らは互いの周りをぐるぐる回っている動物である。そしてこの人間以下の層においては人間のどんな運命も決定されることはできない。アルヴァイナとチッチョは我々が理解できない言葉を話す水槽の中の生物である」⁶⁾と批判的に述べている。またグレアム・ハフは、小説中のイギリスの場面とイタリアの場面が調和しておらず、この小説は最も退屈で最も個性がなくて駄作に最も近いものであると述べている⁷⁾。更にR・E・プリチャードは、この小説に表われているリアリズムを賞賛しているが、アルヴァイナは半分は自己解放をしているが半分は自己破壊に陥っているとし、この小説の題名は半分だけアイロニックであると述べている⁸⁾。

一方で、アルヴァイナの生き方を肯定的に捉えている研究者も少ないながらいる。ジュリアン・モイナンは、アルヴァイナのチッチョとの結

婚を肯定的に捉え、「彼女が姿を消したということは再び発見されるために必要なことである」⁹⁾と論じている。モイナンと同じく、アルヴァイナの生き方を肯定的に捉えているのは、ヴィーナーであり¹⁰⁾、また朝日千尺¹¹⁾であり、アリスター・ニヴン¹²⁾であり、マイケル・ベル¹³⁾である。彼らはアルヴァイナが故郷のイギリスのウッドハウスを捨ててイタリアの山中に入ったことを自らの再発見であり、必要なことであつた、と捉えている。ロレンス自身は、この小説を書き終えた後で、キャサリン・カーズウェルに宛てた手紙において「(アルヴァイナ)は道徳的に墮落してはいない」¹⁴⁾と述べている。筆者にも、主人公であるアルヴァイナの生き方を小説全体の文脈の中で考えてみる時、ロレンスは、この言葉“Lost”を肯定的な意味で使っていると思われる。

本論では、『アルヴァイナの墮落』における「墮落」の意味を考えて、この小説中におけるロレンスの思想を考察してみたい。題名の訳では「墮落」と名詞として表わしているが、これは“Lost”という形容詞の意味を名詞として表記したものである。筆者は、アルヴァイナの生き方は、既成の価値観を批判するものであり、ロレンスが第1作から書き続けてきた主題「黒い男性」によるキリスト教文明の批判という主題がこの小説で大きく出ており、これがアルヴァイナとチッチョの結婚に表わされていると考える。チッチョという男性は「黒い男性」¹⁵⁾の代表的な1人であり、『恋する女たち』の主人公パーキンと同じくらいに重要な存在であると思われる。そして『アルヴァイナの墮落』について肯定的に論じている研究者の論と筆者の論が異なる点は、他の研究者は、ロレンスがキリスト教文明批判をしておりその代わりに異教の賞賛をしていることに言及していないのだが、筆者はロレンスがチッチョをアルヴァイナを導く黒い男性でありまた彼は動物的・本能的な存在が強調されている異教の使者であることを描いているのだということを強調する点である。

小説の時代背景は第一次世界大戦の始まる直前の1913年頃からアルヴァイナが成長して20代の女性になる1930年代までである。この頃アルヴァイナの父親のジェームズ・ハフトンが結婚し、アルヴァイナが誕生する。ロレンスがこの小説を書き始めた時代は第一次世界大戦が始まる直前であり、なおもヴィクトリア朝時代の女性の生き方が中・上流階級の女性には当然のことと考えられていた。それは「家庭の天使」¹⁶⁾という生き方であった。しかし、『アルヴァイナの墮落』は、1912年12月の最初の構想段階では『エルザ・カルヴァウエル』(*Elza Culverwell*)という題名であったが、1913年1月には『ハフトン嬢の反抗』(*The Insurrection of Miss Houghton*)として書き直されたことから伺えるように、主人公アルヴァイナ・ハフтонはヴィクトリア朝の女性の生き方に反抗しようとしているのである。その後『階級の異なる男女の結婚』(*Mixed Marriage*)という題名にも変えられ、更に最終的には『アルヴァイナの墮落』として1920年に出版された。本論の構成は、「序、Ⅰアルヴァイナの父親の墮落の意味、Ⅱアルヴァイナの「墮落」の始まり ①黒い男性グラハムとのつき合い ②助産婦見習い、Ⅲアルヴァイナの迷い、Ⅳナッチャ・キイ・タワラ座、Ⅴアルヴァイナとチッチョの結婚、結論」である。今回の論文では、「Ⅲアルヴァイナの迷い」までを掲載しており、Ⅳ章以降は次回の論輯に載せる予定である。

Ⅰ アルヴァイナの父親の墮落の意味

小説の地理的背景はイギリスの中部地方で、ウッドハウスと呼ばれる地方である。この地名は、多くの研究者が指摘しているようにロレンスの故郷のイーストウッドがモデルになっていると思われる。

アルヴァイナは、地方町の他の人々からは一目置かれる富裕で教養ある両親の元に誕生する。ウッドハウスは確立した町 (well-established

society: 1) であり、人口1万人位である。彼女の父親ジェイズの性質には、ロマンチックさと商人としての計算高さが混ざり合っている。彼は金を目当てとして妻クラリッサと結婚したと思われる。しかし妻が3千ポンドの持参金を持って来ると思っていたのに、8百ポンドしか持って来なかったので、決して彼女を許そうとしなかった、と書かれているように、金を求めるスノブだという印象を受ける。

ジェイズの妻のクラリッサは、アルヴァイナを出産後は、夫から女として扱われなくなり神経を病んで不幸せな人生を歩むことになる。クラリッサの不幸の原因は、全てが夫ジェイズの妻に対する非人間的な態度にあるとは言い切れないが、夫としてのあり方が批判されている部分は大いにあると考えられる。その批判は、マンチェスターハウスというジェイズの館が、彼の商売の失敗の繰り返しによってだんだん縮小されていくことに表われている。マンチェスターハウスの「マンチェスター」という名前は、ジェイズが扱っている女物の服や生地が大都会のマンチェスターから仕入れてこられたものということから来ている。妻との血と肉を備えた官能的な交流を排して、女物の服地や衣裳に執着するジェイズは、いびつな男性と言えるであろう。

しかし、彼の地元の住人にとっては、高級な服や服地は、安売りされたとしても着るのには抵抗があつて、嫌悪されたり笑いの種にされるものである。マンチェスターハウスの1階の売り場は半分に縮小されて、残りの半分は他人の手に渡る。更にそれは三分の一に縮小されてしまう。しかし、ジェイズは、ゴム製品の販売や靴下の販売を手がけるがこれも失敗し、クロンダイクというレンガ鋤の開発に乗り出したり、炭鋤の開発に乗り出したりするが、ことごとく失敗してしまう。女物の服商売からレンガや石炭を扱う仕事に転換していったジェイズは、どんどん無機質な人間に変化していったと思われる。このようなマンチェスターハウスの没落の過程の中でアルヴァイナは成長していき、27歳に

なったのである。

彼女の母親が病弱であったために、アルヴァイナが5歳のときに家庭教師のミス・フロストが雇われる。彼女は堂々とした独身の30代の女性で、ピアノをアルヴァイナやウッドハウスの人々に教える。ジェームズが経済的に力がないので、彼女がピアノ教師として金を稼いだのである。ミス・フロストは、白髪が特徴であることが強調されているが、町の人々には本物の「レイディー」として尊敬されている。しかしアルヴァイナが成長した頃、彼女は亡くなる。

マンチェスターハウスには、もう1人の女性が家政を賄う人として雇われるが、この女性はミス・ピネガーである。彼女も独身であり平凡な女性であるが、家政をきちんと賄うことができるという長所があり、マンチェスターハウスになくてはならない存在になる。しかし「女性」としては魅力があるとは思われぬし、町の人々の間でもミス・フロストほどには存在感を感じられない。

マンチェスターハウスの大人の住人たちは、とにかく世間に指差されないように一生懸命生きているという印象を与えるが、人間として充実した生き方をしているかといえば、その点では読者に物足らなさを与えるのである。

そしてマンチェスターハウスが没落していった原因は、女というものを無視していたジェームズの生きかたのいびつさによる、ということにあるのではないのかと思われる。だが、彼の娘アルヴァイナは、不幸を抜け出して再生を果たすことになる。原題 *The Lost Girl* の“Lost”には1つの意味として「失われた」という意味があるが、マンチェスターハウスの没落には、この意味が込められていると思われる。つまりマンチェスターハウスからは権威と裕福さが文字通り「失われた」のであり文字通り「墮落」したことになるのである。

II アルヴァイナの「墮落」の始まり

① 黒い男性グラハムとのつき合い

アルヴァイナは、25歳になるまでは両親や家庭教師のミス・フロストの影響を受けていて、真の自己が眠ったままの状態であり、ウッドハウスでは影が薄かった。30代のミス・フロストはキリスト教的愛の精神をアルヴァイナに吹き込もうとして、それは表面的には成功したかのようであったが、最終的には彼女の試みは敗北する運命にある。それは、アルヴァイナが官能性を生まれつき備えた女性であったためである。このことは彼女が「古くからの知識」(ancient sapience: 22)を持っていたということから分かるのである。ウッドハウスがキリスト教(組合教会派)の習慣と教えに染まっているため、アルヴァイナも小さい頃から日曜学校へ週2回、礼拝に週1回の割合で通っていた。そしてミス・フロストは従順さと礼儀、親切などのキリスト教的教えを彼女に伝えようとする。しかしアルヴァイナはそのような事柄に対して生まれつきなじまず、あざけりや皮肉っぽさや冷笑を秘めた人間として描かれている。ミス・フロストは彼女を子羊或いは鳩のように育てたかったのだが、アルヴァイナはときどき狼や子ガラスまたはカササギのような嘲りの笑い声を上げてミス・フロストをびっくりさせ狼狽させるのである(21)。アルヴァイナの反キリスト教性は、ガーゴイルの表情を帯びていた(21)、という描写からも分かる。ミス・フロストは、これはアルヴァイナの真の姿ではない、と考えるのであるが、実はこれこそが彼女の真の姿である、とロレンスは考えているのである。アルヴァイナが、キリスト教的な考えを脱ぎ捨てて、最後には下層階級のチッチョと結婚し放浪してイタリアへ行き着く姿には、反キリスト教的な彼女の真の姿が表われている。マンチェスターハウスの没落は、アルヴァイナが真の

自己を得るために欠かせないことであったのである。

アルヴァイナが徐々に真の姿を表わしてゆく過程は、彼女が23歳になったとき、オーストラリア人のアレクサンダー・グラハムという男性と恋愛をすることに見られる。彼女の両親とミス・フロストやミス・ピネガーは、グラハムが気に入らなかった。それは彼が官能的な人間であり、またイギリスの植民地であったオーストラリアの出身者なので、イギリスの中・上流階級の人間たちは彼を劣った人種と考えていたためとも考えられる。彼は「黒い血」(dark blood: 22)を持ち、「黒ちゃん」(darkie: 23)と呼ばれている、と書かれている。グラハムは、ロレンスの作品にたびたび登場する「黒い男性」なのである。彼のこの官能性はアルヴァイナに訴えるものであった。彼女はグラハムを愛したのだが、周囲の人々が2人の結婚に反対したために、結局結ばれなかった。グラハムはオーストラリアへ帰ってしまっていたため、アルヴァイナは見かけ上は彼を忘れたようであったが、しかしウッドハウスの若者たちは彼女を惹きつけず、彼女は心の底ではグラハムを思っていたことが、彼女がいつも彼の写真を見ていたということから分かる。ウッドハウスの若者たちは、彼女には平凡な存在か或いは中身が空っぽであると思われる魅力が感じられなかったのである。

ミス・フロストは、アルヴァイナがグラハムと結婚しないように仕向けておきながら、彼女の好きなようにすればよい、と口では言っている。ここにはミス・フロストの偽善性が表われている。ミス・フロストの特徴である美しい白髪はこのとき薄汚れていた、と書かれている。これは彼女の偽善性を表現しているのである。また彼女の名前である“Frost”は「霜」の意味でありアルヴァイナの生命を枯らしてしまう人間であることを暗示している。そしてアルヴァイナの母親もミス・フロストも、自分を与えることが出来なかった (to submit: 26) ことのためにかえって人生に負けたということが書かれ、アルヴァイナが自己を与

えることこそが彼女の勝利につながるということが分かる。つまり母親やミス・フロストは男性を愛し愛されるという官能性を知らないことが人生の敗者である理由なのであり、彼女たちの不幸の原因なのである。そしてアルヴァイナが自分を「与える」ことこそが「墮落する」(lost)ことの1つの意味なのである(序における“Lost”の5つの意味のうちの①に相当するもの)。ミス・フロストは、アルヴァイナがグラハムと結婚してオーストラリアへ行ってしまうことに恐怖を感じており、これは彼女の屈折した愛を感じさせる。つまりミス・フロストは男性との正常な愛を確立することが出来なかったためにアルヴァイナに異常に執着する同性愛的な女性なのである。

② 助産婦見習い

グラハムとの事件が終わって以後、アルヴァイナはマンチェスターハウスに留まっていることに耐えられなくなるが、これは彼の影響であったと思われる。彼女はまたもや嘲りの笑いをよく浮かべるようになり、ミス・フロストをいらいらさせる。ついにアルヴァイナは助産婦見習いに行きたいと言い出し、周囲の人々が反対するにも拘わらずこれを決行することになる。助産婦という仕事は命の新生に直接関わる重要な仕事であるが、彼女の父親もミス・フロストもレイディーにはふさわしくないと反対したのである。しかし、アルヴァイナは、今やおおっぴらに彼らを笑い侮蔑し、どうしても実行することにしたのである。この決行は、中・上流階級の女性の生き方を逸脱することなので、「墮落」にはこの仕事を選んだことも含まれていると言える(序における“Lost”の5つの意味のうちの①に相当するもの)。アルヴァイナの胸のうちのには「小さな悪魔」(some little devil: 29)が存在していたのである。肉的なことを嫌悪するキリスト教の考え方への批判が、この悪魔の存在と助産婦が結びついて表現されていることから分かる。また、アルヴァイナの

笑いには、『虹』のアナやアーシュラの笑いに通じるものがあるであろう。それは既成の価値観への批判としての笑いなのであり血と肉のある生き方の賛歌なのである。

ロンドンのイズリントンで助産婦として訓練を受けることになったアルヴァイナは、同僚の看護婦や医者と下品な話をし、医者たちといちゃつくのであったが、以前の痩せた青白い容姿は消えて変わりにぼつちやりと肉付きがよくなり顔色も桃色になって明るくなった。そしてこれが真のアルヴァイナであることが分かるのである。作者は、ミス・フロストの清純で高尚な精神性は消え去る時期が来ていると述べている。その代わりにアルヴァイナという紫色で真紅の花が咲く時期が来たと述べる。

A lovely edelweiss—but time it was gathered into eternity. Black-purple and red anemones were due, real Adonis blood, and strange orchids, spotted and fantastic. (36)

(美しいエーデルワイス——しかし摘まれて来世のものになるべきだ。黒紫色と赤のアネモネが新しい真のアドニス血。そして見知らぬ斑点の付いた風変わりな独特のランの花が登場するべきである。)

エーデルワイスは白い花であって、白髪が強調されているミス・フロストを指している。一方、黒紫と赤い血の色のアネモネの花は、ヴィーナスとの恋で有名なアドニスの花（異教の花）であり、この場合はアルヴァイナの官能的な生き方を指している。だが、アルヴァイナは、助産婦の見習いが終わってウッドハウスへ戻ってきたときは、まだ処女のままであった。彼女にふさわしい男性はまだこれから登場するのである。

アルヴァイナは、助産婦としての訓練を終えてウッドハウスへ戻ってきた後に、産婆として短期間働いた。彼女は産婆として生計を立てた

かったのであるが、この仕事で金を儲けることができず計画は失敗に終わった。そして彼女が生命に関わる仕事から離れて、家事とピアノレッスンを始める仕事を始めると、ふっくらとして健康そうで快活だった彼女は、再び痩せて青白い不健康そうな地味な女性に戻ってしまったのである。彼女は24歳になっていた。これはマンチェスターハウスの精神の彼女への影響が、再び大きく作用し始めたためであると考えられる。

この間にアルヴァイナの母親のクラリッサ・ハフトンも長い間患っていた心臓病で亡くなるが、このことに関して、ロレンスは一般的な女性の生き方について批判をしている。つまり女性は男性に幸せにしておこうとしており、それが不可能であると分かると病気になるということであるが、これは男性に責任があるのではなくて、女性の人生観によるものであるということである。

She expected to be made happy. Every woman in Europe and America expects it. On her own head then if she is made unhappy: for her expectation is arrogant and impertinent. The be-all and end-all of life doesn't lie in feminine happiness. (44)

(彼女は幸福にしてもらいたいと期待していた。ヨーロッパとアメリカのどの女もそれを期待する。もし幸福にしてもらえないならばその時は自身で幸福を勝ち取るべきだ。というのは彼女の期待は傲慢で厚かましいものであるからである。人生の究極の目的は女性の幸福の中に存在しているのではない。)

アルヴァイナは親とは異なった世代であり、彼女の運命によって未来に向かって新たな人生を見つけようとするはずであるが、ミス・フロストはクラリッサに同情的で、やはり男性にその不幸の責任を押し付けて考えるタイプとして描かれている。ミス・フロスト自身も、肺炎のため

にクラリッサの死後間もなく逝去する。そして彼女の死と共にマンチェスターハウスの精神も死んだと書かれているので (52), アルヴァイナは、この後新たな自己を発見することになる暗示がある。そしてアルヴァイナは、ミス・フロストよりもミス・ピネガーに一層共感を覚えるようになっていたのである。

With Miss Frost all was openness, explicit and downright. Not that Miss Frost trespassed. She was far more well-bred than Miss Pinegar. But her very breeding had that Protestant, northern quality which assumes that we have all the same high standards, really, and all the same divine nature, intrinsically. It is fine assumption. But willy-nilly, it sickened Alvina at this time. (46)

(フロスト先生に関しては、全てがはっきりしていて開放された状態であった。先生が他人に侵入したという訳ではなかった。彼女はピネガーさんよりずっと育ちが良かった。しかし彼女のまさにその育ちは、我々は全員が同じ高貴な水準を本当に持っており、本質的に全く同じ聖なる性質を持っているというあのプロテスタントの北方的特質を持っていた。それは素晴らしい仮説である。しかし否応なくそれはこの時期においてアルヴァイナをむかつかせた。)

ミス・フロストの心情はキリスト教的博愛と献身と向上の気高いものであるが、どの人間にもその基準が絶対的であるとして押し付けることをロレンスはアルヴァイナの立場を借りて批判していると思われる。北方的キリスト教精神を押し付けることは「虐めと狭量さ」(46) であると書かれている。ミス・ピネガーには、ミス・フロストのような狭量と押し付けがましさがいないので、アルヴァイナはミス・ピネガーに共感を覚えたのである。

そしてこの頃アルヴァイナは、父親が経営するスロトル・ヘイパニ炭

鉱の内部を見学することになった。地下で働く男たちは、むさくるしくグロテスクで、地下は墓場のようなであったが、しかもアルヴァイナはそこに惹かれたと書かれている。

It was as if she were in her tomb forever, like the dead and everlasting Egyptians. She was frightened, but fascinated. (47)

(彼女は、死んでミイラにされたエジプト人のように永遠に墓の中に閉じ込められたような気がした。怖かったが魅惑されもした。)

そしてこの後、アルヴァイナは、世界は新たなイエス・キリストを求めているが必要なのは空から降りてくる救世主ではなくて、地下から出てくる「黒い神」(Dark Master: 48) だと思うのである。彼女は地震が襲いかかってくるのを渴望するかのように、ミッドランドへの郷愁を感じるのである。

To feel the earth heave and shudder and shatter the world from beneath.
To go down in the debacle. (48)

(大地が盛り上がり震え下部から世界を粉々にするのを感じたい。
総崩れになってしまえばいい。)

筆者は、ロレンスの「黒い神」の思想の萌芽が第1作の『白孔雀』から存在していることを、そしてそれはキリスト教文明への作者の批判であることをこれまでに書いた論文で述べてきた。今述べたように、この「黒い神」の思想は『アルヴァイナの墮落』にも入っているのである。それが“Dark Master”という言葉で表わされている。アルヴァイナは炭鉱内部に降りていって闇の不思議な異教的官能性に惹きつけられたが、A・ニヴンは、この点に関して、彼女が炭鉱内部で闇の力とその無

意識性を感じたために、後にチッチョに惹かれることになったのであると述べて、彼女が炭鉱内部へ降りて入ったことの重要性を説いている¹⁷⁾。

ミス・フロストが死んで、アルヴァイナがジブシーのチッチョと恋をして結婚するのは、彼が「黒い神」の使者、つまり「黒い男性」だからである。

III アルヴァイナの迷い

アルヴァイナが26歳になったとき、ジェームズの経営する炭鉱は破綻をきたし、彼は個人経営ホテルを始める計画に夢中になるが、アルヴァイナとミス・ピネガーにとっては、全てを考慮したときこの計画も失敗に終わるであろうと予測されたので、2人は様々な手段を講じてジェームズに計画をあきらめさせる。この間に、アルヴァイナは自分が処女のままで一生を終えるのではないのかという不安に駆られ、鉛管工のアーサー・ウィタムの弟のアルバートと一時的に付き合うことになる。アルバートはオックスフォード大学出であり南アフリカで校長を務めていたが、学位取得のために一時的に故郷のウッドハウスに戻っていたのである。彼は、アルヴァイナの方が自分よりも社会的地位が上なので、彼女と結婚すれば自分の地位にも箔が付くと考えている節が見られる。しかし非凡な性質を秘めているアルヴァイナには、彼の慣習的な生き方は受け入れることが出来ないものであると思われ、最終的に彼と決別をする。アルバートは彼女には退屈な男性だったのである。偽りの墮落を体験しそうな彼女はなんとか踏みとどまった。彼との結婚の想定は本物の「墮落」には至らないだろうと予想されたからである。ゆえにアルバートとの関わりは題名の「墮落」の意味からは除外されるべきである。一方で、このエピソードには、アルヴァイナの迷いが表われて

いるので「迷った」という“Lost”の1つの意味が入っていると考えてもよいであろう。

アルヴァイナはアルパートと別れてから、マンチェスターハウスの重みにますます押しつぶされそうになる。この頃彼女は30代になっている。マンチェスターハウスが、古い価値観の象徴となっていると考えられる。つまりアルヴァイナは、淑女なのである。それゆえ彼女は、独身だとしても仕事を持って自立する生き方、金儲けを生きがいとする生き方には身を投じる気になれないのである。この時代には、女性が仕事を生きがいとするという考え方はまだ世間で認められていないのであった。独身女性は、オールドミスという蔑みで見られるのがおちであった。

Could anything be more infra dig. than the performing of a set of special actions day in day out, for a life time, in order to receive some shillings every seventh day. Shameful! A condition of shame. The most vulgar, sordid and humiliating of all forms of slavery: so mechanical. (82)

(七日ごとに幾シリングかを得るために一生毎日決まったことをすること以上に品格を下げることもあるだろうか？ 恥ずかしい！ あらゆる奴隷状態の中で最も粗野でむさくるしくて下品なことであった。余りにも機械的だ！)

仕事は、人間を機械的な存在にすることというのをロレンスはアルヴァイナの心を代弁して述べていると思われる。彼は、女性が創造的な仕事に携わる可能性について考えるには至っていないのであろう。彼には、人間が機械のようであることは最も忌まわしいことであり、この時代にはその忌まわしい状態が当たり前であることを批判している。

しかしながら、生きるためには嫌な仕事もしなければならない。ま

た、金さえ儲けられるならばなりふり構わないという人間はいつの時代にも数え切れないほどいるのである。ジェイムズは、この頃70歳になっていてかなりエネルギーを減らしていたが、なおも金儲けのために新たな仕事を企画することには積極的であった。それゆえビジネスで成功することを求めているメイ氏とめぐり合い、彼が支配人となって映画館を経営することになったのである。アルヴァイナとミス・ピネガーはもちろん反対したが、ジェイムズは聞く耳を持たなかった。そしてアルヴァイナはこの映画館兼演芸場「ハフトンズエンデヴァー」でピアノ弾きの役目をするようになったのである。安っぽい下品な映画館の外観と、観客に混じって芸人に怒鳴られながらピアノを弾くアルヴァイナの姿は、まさに淑女から「墮落」した姿である。しかしこれも彼女の偽りの墮落した姿に過ぎない。彼女はここで終わらない。この「ハフトンズエンデヴァー」は、そこで演芸をするためにナッチャ・キイ・タワラ座がやってきて、その一座の一員であるチッチョと恋愛をする運命をアルヴァイナに与えたのであった。

しかしジェイムズには、この映画館の経営は金儲けのためのものであり、一日の営業が終わった後で、観客が落としていった金を彼が1人で数える姿はひどく読者を嫌悪させるものである。赤黒い青銅の硬貨は血を吸った蚤のように膨れ上がっていると書かれ(112)、作者の金に対する嫌悪感が表われている。

注

- 1) 拙訳書『アルヴァイナの墮落』(D・H・ロレンス著/山田晶子訳:近代文芸社, 1997年)。本論における当小説の訳の引用は、全て本書からによるものである。
- 2) Lawrence, David Herbert. *The Lost Girl*. (Cambridge: Cambridge University Press), 1981.
当小説の原文からの引用は、全て本書からによるもので、引用の末尾に頁が載せてある。

- 3) 小学館編『ランダムハウス英和大事典』(小学館, 1992)の“lost”の項(1524頁)参照。
- 4) Draper, R. P. (ed.). *D. H. Lawrence: The Critical Heritage*. (London: Routledge & Kegan Paul), 1970, p. 143.
- 5) *Ibid.*, p. 144.
- 6) *Ibid.*, pp. 148–150.
- 7) Hough, Graham. *The Dark Sun: A Study of D. H. Lawrence*. (New York: Octagon Books, 1973), p. 90.
- 8) Pritchard, R. E. *D. H. Lawrence: Body of Darkness*. (London: Hutchinson University Library, 1971), p. 132.
- 9) Moynahan, Julian. *The Deed of Life* (Princeton: Princeton University Press, 1972), p. 423.
- 10) Gary A. Wiener. “Lawrence’s ‘Little Girl’” in David Ellis and Ornella De Zordo (ed.). *D. H. Lawrence: Critical Assessments Vol. II* (East Sussex: Helm Information, 1992), pp. 422–430.
- 11) 朝日千尺『D. H. ロレンスのフェミニズムを読む』(英宝社, 2000)の第Ⅲ章「女性性への飛翔——『ロスト・ガール』」を参照のこと。
- 12) Niven, Alastair. *D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), pp. 114–132.
- 13) Bell, Michael. *D. H. Lawrence: language and being* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), pp. 136–139.
- 14) Boulton James T. and Andrew Robertson (ed.). *The Letters of D. H. Lawrence Vol. III*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), p. 525.
- 15) 拙論「D. H. ロレンスの初期長編小説における‘The Dark God’の思想について(1)——『白孔雀』と‘The Dark God’——」(愛知大学文学会『文学論叢』第123輯, 平成13年2月)を参照のこと。
- 16) ヴァージニア・ウルフが命名。小野修編『20世紀イギリス作家の肖像』(研究社, 1993), p. 51を参照のこと。
- 17) Niven, *D. H. Lawrence*, p. 127.

